新版 フランス文学史

饗庭孝男
朝比奈誼
伊藤洋
岩崎力
植田祐次
奥本大三郎
加藤民男
加藤尚宏
窪田般彌
倉智恒夫
清水正和
鷲見洋一
田辺保
新倉俊一
花輪莞爾
原好男
平岡篤頼
松崎芳隆
山本顕一
執筆

白水社

新倉俊一・神沢栄三・天沢退二郎／訳

フランス中世文学集

第一巻　信仰と愛と　定価5500円

第二巻　愛と剣と　定価4800円

第三巻　笑いと愛と　定価5200円

文庫クセジュ

ソーニエ／山田・中川・田村訳　定価980円
209　改訳十八世紀フランス文学

ソーニエ／小林善彦訳　定価880円
246　改訳十七世紀フランス文学

エスカルピ／大塚幸男訳　定価880円
[illegible]　文学の社会学

[illegible]／岡部・安藤訳　定価880円
631　十五世紀フランス詩

ランセ／加藤民男訳　定価880円
640　十九世紀フランス文学の展望

[illegible]ンジェ／高田・伊藤訳　定価880円
644　プレイヤード派の詩人たち

ブーテ，ストリューベル／神沢栄三訳　定価880円
657　中世フランス文学入門

ブリュネル他／平岡・川中子訳　定価880円
666　文芸批評の新展望

チーゲム　辻昶訳　定価880円
706　フランス・ロマン主義

ソーニエ　神沢・高田訳　定価880円
711　中世フランス文学

ソーニエ　二宮・荒木・山崎訳　定価880円
714　十六世紀フランス文学

ディディエ／小西嘉幸訳　定価980円
716　フランス革命の文学

定価は消費税込です。
重版にあたり，定価が変更になることがありますのでご了承下さい。

江苏工业学院图书馆
藏书章

新版　フランス文学史

1992年2月20日印刷
1992年3月10日発行

著者 © 饗庭孝男　清水正和
朝比奈誼　鷲見洋一
伊藤洋　田辺保
岩崎力　新倉俊一
植田祐次　花輪莞爾
奥本大三郎　原好男
加藤民男　平岡篤頼
加藤尚宏　松崎芳隆
窪田般彌　山本顕一
倉智恒夫

発行者　藤原一晃
印刷者　竹内清一

発行所　101 東京都千代田区神田小川町3の24
電話 03-3291-7811（営業部），7821（編集部）
株式会社白水社

振替　東京 9-33228　Printed in Japan　加瀬製本

ISBN4-560-04286-1

まえがき

私たちがフランスを知ろうとして地図を開いてみるとき，すぐに気がつくことは，フランスがほぼ正六角形の均整のとれたかたちをしているということである．しかもその三方は海に，あとの三方は山にかこまれている．その位置は北極からも赤道からもひとしい距離にあり，またヨーロッパの中心に位している．気候についていえば，海洋性，大陸性，地中海性の気候が適度にまじり合い，その緯度が比較的高いにもかかわらず，フランスはほぼ温暖で住みやすい．「うまし国フランス」La douce France や，「美しき国」Le beau pays と呼ばれるゆえんである．

一方，この国の人種についていえば，太古の地中海種族から，ケルト族，さらにはローマ人，フランク族とあいついでこの国にあらわれ，現在のフランス人を形づくるにいたった．すぐれた歴史学者，P. ガクソットのいう「フランスが多彩な才能を持っているのは，そうした人類学的なゆたかさによる」という意見も積極的な理解の仕方として重要である．このような，地理的・人種的な条件から生れた自然の，調和と均衡，多様なものの統一が，そのままにフランスの文化の性格を基礎づけたといっても過言ではない．

また歴史の進展にともない，ギリシアからは人間を尺度とした芸術・学問への愛を，ローマからは秩序や社会への深い関心を，さらにはキリスト教から信仰への熱情を学び，フランス人は文化に対する鋭敏で，しかも豊かな感覚を培った．それがフランス独自の，人間と社会への関心を育て，美意識を形成し，また明晰で相対的，かつ柔軟な思考をつくり，あくことのない知的好奇心と創造的な能力を練磨したのである．フランス文学は，このような土壌と歴史のなかから花咲いたといってよい．

私たちはそうしたヨーロッパのなかのフランスという位置を視野におさめながら，この『フランス文学史』を書いたつもりである．四方を海にかこまれ，ともすれば文化を純粋・単一なものと見がちな日本人の態度でフランス文学を考えることはできない．他の国とほぼ陸つづきであり，わずか5，6時間で行き来することのできるヨーロッパの国は，お互いに深い有機的なつながりのなかで生きている．また歴史的にも相互の影響は深く，それを無視しては1つの国の文学を考えることはできない．たとえば中世フランス文学をとってみても，それはヨーロッパ中世の文化に対する理解があってはじめて1つのイメージを

むすぶものである．この『フランス文学史』においても，基本的に，ケルト文化，ギリシア・ローマ文化，キリスト教というヨーロッパの主要な文化の構造の理解を前提としたゆえんである．

しかし文学というものは，その質はかわらなくとも表現は多様に，しかもダイナミックに時代と密接にむすびつきながら変化していく．その点で，私たちは，時を得てフランス文学史を書きあらためてゆくことにもそれなりの意味があると信じている．この文学史はそれゆえ，すでに書かれた文学史の業績を十分にふまえながらも，新しい評価を加え，現在の時点からみて，フランス文学の流れとは何か，という問いに答えようとしたものである．基本的な時代区分，およびジャンルの取扱いについては，ピエール・ブリュネル編『フランス文学史』Pierre BRUNEL, *Histoire de la Littérature française* (Bordas, 1972) によったが，私たち独自の判断でこれを変え，また内容はすべて書き下しとした．さらに読者の興味を深めるために，主要な作品には梗概をつけ，また少しでも原作の味わいを知るために引用を行ない，巻末にはその原文を年代順にならべ，文学史に奥行とふくらみを与えようとした．また図版，年表をフランス文学を中心に，他の芸術の諸ジャンル，および政治・社会とも関係づけて添加，作製した．

なお，執筆にあたっては，原稿が書かれた段階で執筆者相互に検討しあい，意見を交換してはこれに加筆した．編者はこの作業の過程で数十回にわたって会合を重ね，かつ文体の統一をはかった．しかしながら不備が生じることはさけがたい．読者諸賢の叱正を仰ぐことができれば幸いである．また以上のような編者の意図をくみ取り，快く執筆を引き受けて下さった諸兄に厚く御礼申し上げるとともに，ほぼ4か年にわたり，その構想から実現への過程で献身的な努力を惜しまれなかった白水社編集部の方々，とくに鷲森保氏に，心から感謝する次第である．

1979年3月10日

編　者

新版にさいして

1979年に最初の版を出して以来，12年が経過した．幸い，毎年増刷を行ってきたが，その間，文学史上の評価にも多少の変遷があり，また今日までの記述を加える必要も生れ，新たに全体を再検討し，記述及び年表を加筆訂正して，なお暫くは評価に堪えられるよう心掛けた．御愛読を切望する次第である．

1992年3月

編　者

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

編集　饗庭孝男　朝比奈誼
加藤民男

執筆〔フランス文学の基盤〕
饗庭孝男　松崎芳隆

〔中　世〕　新倉俊一

〔16世紀〕　山本顕一

〔17世紀〕　田辺保　伊藤洋

〔18世紀〕　植田祐次　鷲見洋一
原好男

〔19世紀〕　加藤民男　朝比奈誼
奥本大三郎　加藤尚宏
倉智恒夫　清水正和
花輪莞爾

〔20世紀〕　饗庭孝男　朝比奈誼
岩崎力　窪田般彌
平岡篤頼

目　次

まえがき …… iii
凡　例 …… x

フランス文学の基盤

1 ケルト文化とフランス文学 …… 1
2 ギリシア・ローマ文化とフランス文学 …… 4
3 キリスト教とフランス文学 …… 7

中　世

◇ 年表　12—15
◇ 中世の展望 …… 16
1 中世フランス語 …… 17
ラテン語からフランス語へ／オイル語とオック語
2 文学の伝達形式 …… 19
3 武勲詩 …… 19
武勲詩の分類／口誦の文学／起源／『ロランの歌』／武勲詩の変質
4 12，13世紀の抒情詩 …… 21
トルバドゥール／トルヴェール／「民衆的」抒情詩／そのほかの詩／町民気質の詩人たち／リュトブフ
5 12，13世紀の物語 …… 25
宮廷風騎士道物語／古代もの／ブルターニュもの／マリ・ド・フランス／『トリスタンとイズー』／**クレチヤン・ド・トロワ**／聖杯物語群／冒険物語
6 笑いの文学 …… 31
ファブリオ／『狐物語』
7 教化文学 …… 33
聖者伝／宗教的小話／説教詩
8 演劇の発生 …… 34
準典礼劇／世俗劇
9 知の文学 …… 35
世俗の教化／『バラ物語』前篇／『バラ物語』後篇
10 歴史・年代記 …… 36
12，13世紀の歴史・年代記／14，15世紀の歴史・年代記
11 14，15世紀の演劇 …… 38
聖史劇／喜劇
12 14，15世紀の抒情詩 …… 38
ギヨーム・ド・マショー／ユスターシュ・デシャン／クリスチーヌ・ド・ピザン／アラン・シャルチエ／シャルル・ドルレアン／**ヴィヨン**
13 中世末期の物語 …… 42

16 世 紀

◇ 年表　44—45
◇ 16世紀の展望 …… 46
1 フランスのルネサンス …… 47
イタリア文化の移入／ユマニスムと宗教改革運動／フランソワ1世と王姉マルグリット／16世紀後半のフランス——宗教戦争／16世紀におけるフランス語
2 マロとその周辺 …… 50
大押韻派とルメール・ド・ベルジュ／クレマン・マロ／マロ派の詩人たちと「女性論争」
3 文学と宗教の巨人 …… 52
ラブレー／カルヴァン
4 物語作家たち …… 56
マルグリット・ド・ナヴァール／デ・ペリエ／デュ・ファイユ
5 ユマニストたち …… 58

フランス語の守り手たち／翻訳家と科学者
6 リヨン派の詩人 …… 59
セーヴ／2人の女流詩人
7 プレイヤッド派 …… 61
デュ・ベレー／**ロンサール**／その他のプレイヤッド派
8 16世紀の演劇 …… 66
9 内戦の時代の文学 …… 66
モンテーニュ

17 世 紀

◇ 年表　72—75
◇ 17世紀の展望 …… 76
I 太陽王の出現まで／II 社交界の成立／III 節度と普遍性

◈ 前古典主義の時代　79

1 バロックの詩人たち …… 79
ドービニェ
2 マレルブとその周辺 …… 80
マレルブ／マレルブの弟子と対立者
3 近代的自我と懐疑精神 …… 82
デカルト／リベルタンの思想／レス枢機卿
4 バロックの演劇 …… 84
演劇の楽しさの発見／古典劇への道：理論と実践
5 古典悲劇の誕生 …… 86
コルネイユ／転換期の悲劇作家たち
6 さまざまな小説の傾向 …… 89
『アストレ』／英雄小説の流行／ビュルレスクの作家など

◈ 古典主義の時代　92

7 人間の偉大と悲惨 …… 92
パスカル
8 「笑い」の演劇と「宿命」の演劇 …… 96
モリエール／**ラシーヌ**／古典劇の衰退
9 自然と良識のポエジー …… 103
ラ・フォンテーヌ／ボワロー
10 モラリストと心理小説 …… 106
ラ・ロシュフコー／セヴィニェ夫人／ラ・ファイエット夫人／ボシュエ
11 17世紀末の作家たち …… 110
ラ・ブリュイエール／フェヌロン／ベール／フォントネル
12 新旧論争 …… 113

18 世 紀

◇ 年表　116—119
◇ 18世紀の展望 …… 120
I 理性による批判と感性の称揚／II 趣味の変化／III サロン，アカデミー，カフェ，フリーメーソン結社／IV 現実の多様性の発見
1 啓蒙思想の展開 …… 123
自由検討の精神／唯物論者たち／『百科全書』の思想／哲学者と君主／現世と後世の神／コンドルセと革命
2 文学と社会 …… 128
文学者の困難な状況／検閲制度と地下出版／民衆と行商の文学
3 思想家たち …… 129
モンテスキュー／**ヴォルテール**／**ルソー**／**ディドロ**
4 小説の概観 …… 138
小説の受難とジレンマ／意識と世界との出会い／1人称小説の変種，書簡体小説
5 風俗と心理の地平 …… 140
ル・サージュ／マリヴォー／クレビヨン・フィス／プレヴォー
6 思想小説の実験 …… 143
モンテスキュー／ヴォルテール／ルソー／ディドロ
7 18世紀末の作家たち …… 146
レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ／ベルナ

ルダン・ド・サンニピエール／**サド**／**ラクロ**
8 古典劇からの脱却 …… 151
マリヴォー／ボーマルシェ
9 詩情のゆくえ …… 154
シェニエ
10 社交性の文学 …… 156
モラリストたち／回想録と書簡／定期刊行物
11 ユートピアとイリュミニスム …… 158
匿名の哲学者たち／ユートピアと小説／合理主義への反動／幻想文学の源流
12 革命期の文学 …… 159
文学の観念の拡大／雄弁家たち／ジャーナリズムと世論／演劇の効用

19 世 紀

◇ 年表 162—165
◇ 19世紀の展望 …… 166
◇ 19世紀前半の思想 167

◈ ロマン主義 168

I ロマン主義確立に至るまでの過程／II ロマン主義の特質とそのさまざまな現われ／III ロマン主義における各ジャンルの概観
1 ロマン主義の詩 …… 173
2 ロマン主義の演劇 …… 174
3 ロマン主義の小説 …… 175
スタール夫人／**シャトーブリアン**／セナンクール／コンスタン／ラマルチーヌ／**ユゴー**／**ヴィニー**／**ミュッセ**／**ネルヴァル**
4 近代小説の誕生 …… 190
スタンダール／**バルザック**
5 ロマン主義の他の顔ぶれ …… 197
ノディエ／メリメ／サンド／デボルドニヴァルモール／小ロマン派と地方の詩人
6 新聞小説 …… 199
7 ロマン主義時代の歴史 …… 200
ミシュレ
8 批評文学の成立 …… 201
サントニブーヴ
9 文学運動としてのロマン主義の終焉 202
10 新しい戦慄の創造 …… 203
ボードレール

◈ 50年以後の科学的実証思想の隆盛とレアリスム 206

11 混沌から新たな展開へ …… 206
12 実証思想の展開 …… 207
13 文学運動としてのレアリスム …… 207
フローベール
14 レアリスムの演劇 …… 211

◈ 自然主義 211

15 自然主義の小説 …… 212
ゴンクール兄弟／**ゾラ**／モーパッサン／ユイスマンス／ドーデ／他の特異な作家
16 自然主義の演劇 …… 218
17 自然主義の衰退 …… 218
18 高踏派の詩 …… 219
ゴーチエ／ルコント・ド・リール／他の高踏派の詩人たち
19 近代詩の流れ …… 221
ヴェルレーヌ／**ランボー**／**マラルメ**
20 デカダン(頽唐派) …… 226
21 象徴主義 …… 228
ラフォルグ／モレアス
22 ベルギーの象徴派詩人 …… 230
23 象徴主義の演劇 …… 230
ジャリ／メーテルランク
24 南仏文芸復興運動の詩人たち …… 231
25 シュールレアリスムの始祖 …… 232
ロートレアモン
26 超自然主義の作家たち …… 233

バルベイ・ドールヴィイ／ヴィリエ・ド・リラダン／ブロワ
27 世紀末から20世紀へ …… 235
ロチ
28 批評——基準と印象 …… 236

20 世 紀

◇ 年表　238—241
◇ 20世紀の展望 …… 242

◈ ベル・エポックの文学　244

1 文壇の大御所たち …… 245
ブールジェ／バレス／A.フランス
2 ブルジョワ演劇の隆盛 …… 247
旧時代の演劇／ロスタン／**クローデル**
3 象徴主義からの脱出と精神の自立　250
ジャム／**ペギー**／**ヴァレリー**
4 新しい胎動と「N.R.F.」 …… 255
「N.R.F.」の創刊／1913年の奇蹟／アラン＝フルニエ／リヴィエール／ラルボー／**ジード**／**プルースト**
5 20世紀前半の思想の流れ …… 263
ベルクソン哲学とその周辺／カトリシスムの復興
6 文芸批評の開拓 …… 264
「N.R.F.」誌とチボーデ／創作活動としての批評

◈ 両大戦間の精神と芸術　265

7 20年代の小説 …… 265
心理小説の作家たち／ポピュリスムの小説／逃避の文学
8 時代の壁画としての「大河小説」　267
ロラン／デュアメル／ロマン／マルタン・デュ・ガール
9 「現代派」の詩人たち …… 270
アポリネール／コクトー／ファルグ／ジャコブ／ルヴェルディ／シュペルヴィエル
10 ダダイスム …… 273
ツァラ
11 シュールレアリスム …… 274
ブルトン／アラゴン／エリュアール／デスノス
12 30年代の小説 …… 277
サン＝テグジュペリ／**マルロー**／ドリュ・ラ・ロシェルとモンテルラン／コレットおよび大地の文学者たち
13 霊的冒険の文学 …… 282
モーリヤック／**ベルナノス**／グリーン／セリーヌ
14 演劇における伝統と革新 …… 288
演出家の活躍／伝統を継承しようとする人びと／新しい演劇を目ざす実験／ジロドゥー

◈ 実存と文学的実験　291

15 実存主義と「不条理」の文学 …… 291
サルトル／実存主義の周辺／**カミュ**
16 戦後の詩人たち …… 297
4人の詩人／他の詩人たち
17 演劇の終末か新生か …… 299
演劇の大衆化／既成作家の活躍／50年代の前衛劇
18 根源的反省から未来の書物へ …… 302
青い軽騎兵たち／新しい文学の予感／ポーランとクノー／ヴィアンとグラック
◇ **文学を対象とする文学**：バタイユ／ブランショ／ベケット
◇ **アンチ・ロマンからヌーヴォー・ロマンへ**：サロート／ビュトール／ロブ＝グリエ／シモン／デュラス／その他の作家
◇ **「私的」始源と身体的言語へ**：ソレルス／ル・クレジオ
◇ **さまざまなヌーヴェル・クリティック**：ジュネーヴ学派／バシュラールとその流れ／その他／狭義のヌーヴェル・クリティック／バルト
◇ **哲学との交流**
引用原文 …… 317
索　引 …… 329

フランス文学の基盤

1　ケルト文化とフランス文学——森の文化

現代に息づくケルト文化　明晰であり，合理的であるとされているフランス人の心性も，一歩ふみこんでみると私たちは古い民俗的な思考や習慣が息づいていることに気づくはずである．人間の感覚や魂の働きというものは，文明がすすみ，生活の形態がかわっても思いのほかに変化するものではない．洗練された「文化」もその根底に，それを支えている「自然」があることを人は閑却視しがちである．たとえば20世紀初頭の作家であり，パリの社交界ですごしたこともあるマルセル・プルーストの文章に次のような一文があることは興味ぶかい点であろう．

> 「私はあのケルトの信仰を理由があると考えるのだ，私たちの失った人びとの魂が，何か下等な存在，獣，植物，無生物のなかに囚われており，実際，私たちがふとそうした樹のかたわらを通りかかったり，そのような魂の牢獄である物を手にする日，それは決して多くの人びとにはやって来ないのだが，そのような日が来るまで失われてしまっている．だが，そのようなことが起ると，その魂はふるえ，私たちを呼び，私たちがその声を聴き分けるや，たちまちにして呪縛(じゅばく)が解けてしまう．このように魂は，私たちによって解放され死にうちかち，私たちと一緒に生きることになる．」
>
> (『失われた時を求めて』)

ここでプルーストは，カエサルのゴール Gaule 征服以前，このフランスの土地にいたケルト人の信仰にある霊魂不滅の説をとりあげているのだが，彼はその説を，理性や意志の力ではいかんともしがたい隠れた記憶を，感覚が偶然的な契機によって喚起してくれるという，あの恩寵的な至福の体験（マドレーヌの紅茶体験）を語る前おきとして使ってい

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

るのである．プルーストの文学の核心をつくる独創的なその思考の基盤に，古いケルト信仰が一つの支えになっていることは，きわめて注目すべき点ではないだろうか．プルーストはロマン主義者たち，とくに，ケルト文化が今なお息づいているブルターニュの「自然」を文学の母胎としたシャトーブリアンの文学を愛したが，そのことも彼の思考に何らかの意味をもっていたことは想像にかたくない．

けれどもこのようなケルト文化の痕跡はプルーストのみならず，例えば，19世紀の詩人，ジェラール・ド・ネルヴァルの作品にもしばしばそれがうかがわれる．ヴァロワの森の中で幼年時代を過ごした彼のなかに，森の「自然」に深くつながるケルト文化への想像がはたらき，その作品のなかに現われたとしても不思議ではない．事実，『火の娘』にはケルト信仰の担い手のドルイド僧や戦士たち，森の神話への言及があり，また，ジャン=ジャック・ルソーの「自然」に寄せる思考をとおしてのケルト的な精神風土への愛が語られている．森をその文学の母胎とした作品には，他にもアラン=フルニエの，ソーローニュの森に幼年時代を過ごした体験を元にした『ル・グラン・モーヌ』，また現代の作家，ジュリアン・グラックの『アルゴールの城にて』をはじめとし，『森のバルコニー』や『陰欝(いんうつ)なる美青年』がたちどころにあげられよう．森と廃墟の館，美しい神秘的な女性と，その城館を「探索」するというスタイルが，ネルヴァルやアラン=フルニエ，グラックに共通したものであることはいうまでもない．それは「中世フランス文学」の項で語られる「聖杯物語」の系譜につながっているのである．

*

ケルトの歴史と思想　このようにフランス文学の奥深いところでケルト文化が息づいている．ではそのケルトとはどういう民族であったのだろうか．ケルト Celtes 人は，元来フランスに住んでいたのではない．アーリア族にその源を持ち，青銅・鉄器時代にライン河からドナウ河にいたる地域に住んでいたが，紀元前6世紀以降，ほぼ3期にわたって，今のフランス，イタリア，スペイン，イギリス，あるいはハンガリーやトルコに至るまで移住し，その勢力を拡大していった．ギリシア人は東方にやってきたケルト人をガラテース Galates と呼び，ローマ人は彼らの土地をガリア Gallia と呼んだ．(Gallia はガリア人を示すラテン語 Gallus の複数 Galli に由来する．) この名前は，紀元前167年頃，大カトー（紀元前234-149）の『ローマ起源論』のなかにはじめてあらわれた．

ケルト人がフランスの土地，すなわちゴールに移住してきた頃，その2/3は森林地帯であり，したがってケルト人は当然のことながら主としてその森林を生活の場とした．現在でも，グロボワ（大樹），デュボワ（森）という名前がフランス人に多いこともそうした名残りの1つである．ギリシア・ローマの「文化」が「石の文化」ならば，フランスのそれは，出発の当初「森の文化」であったともいうこともできよう．先にのべたプルーストやネルヴァル，アラン=フルニエ，ジュリアン・グラックの文学が，森をその文学の母胎としたこともうなずける点であろう．

さて，フランスの先住民族であったリグリア人，イベリア人，ギリシア人等を征服してこの地に住んだケルト人は，ローマ人がパーギー pagi と呼んだ共同社会をもち，ほぼ1000万から1500万ほどが300から400の部族(トゥーハ)をつくり，その上にカエサルが「キーウイタ

ース」と呼んだ50から60ほどの政治集団があった．彼らは土地を所有し，王，貴族，平民と奴隷をもち，ドルイド僧（Druide＝知者の意）という占い・予言・教育を司る祭司を中心に生きていた．彼らの住いは森の空地や高原につくられた城塞都市であり，それは「高城」と呼ばれる直方形，円形のものである．彼らは開墾，農業，牧畜を行い，ローマと通商し，羊毛や塩漬けの食料を送り，奴隷を用立て，それと引きかえに葡萄酒，彩色陶器，鐘や金属製品を手にしていた．彼らの文化のトポスで特に知られているのは，ハルシュタット，ラ・テーヌの文化である．

ケルト人は戦いに勇敢であり，「神々を愛し，卑しいことをせず，大胆の気を培う」がモットーであった．これは後にゴールを征服したローマのカエサルの著『ガリア戦記』に詳しい．ドルイド僧は魔術も行い，部族の政策を決定した．樹木信仰では樫の寄生木を礼拝し，他に泉，牡牛や猪を崇拝し，神と人間の神秘的な媒介者であった．ケルト人は霊魂不滅を信じた．死者は「常若の国（テイール・ナ・ノーグ）」へゆくが，生死の交流があると考えた．また「切られた首」の造型化があるが，それは頭部に霊魂があり，従ってその霊との交感ができると信じたからである．今日でも「ロマネスク」教会にしばしば頭部だけの彫刻が，時に獣面と交互に軒蛇腹にみられるのもそれと関係がある．ケルト人の装飾文様として渦巻文様は多いが，貴金属や櫂，首輪，腕輪の渦巻文様の中に人頭があるのも興味ぶかい．渦巻文様が本来，「生命」的なものを表わすとすれば，そこにもケルト人の信仰の形を知る上で重要な点がある．いずれにせよ，このケルト人の「霊魂不滅」が同じく「霊魂不滅」の思考をもつキリスト教を受け入れる点で意味をもったことは疑いを得ないところである．

けれどもケルト人は，ギリシア・ローマ人たちがつくった大きな石造建築物をほとんどのこさず，また政治的な意味での国家の概念を持ってはいなかった．信仰や倫理では1つに結ばれてはいても，政治的な統一を持っていたわけではない．このことがやがてカエサルの征服をゆるす要因となったのである．断続的なローマ人の侵攻ののち，紀元前58年のカエサルのゴールに対する攻撃以後，ケルト人は次々にローマ人に打ちやぶられ，一時は勇敢な将，ヴェルサンジェトリクス VERCINGÉTORIX のもとに奮起したものの，アレジアの決戦に敗れ，紀元前52年9月，ローマの軍門に下った．しかし，この勇将をしのんで，その名前は，今もパリの大通りに与えられている．カエサルの征服以後，ゴールの地は次第にローマ化される．その過程はほぼ500年つづき，ゲルマンのフランク王，クロヴィス CLOVISによってこの地が征服される時点でおわった．その期間を一般に，ガロ＝ロマンと呼んでいるが，ケルト語も次第にラテン語にかわられ，4世紀に至ると，ほんの数十語をのこすのみで消滅した．農村の用語，都市の名前に，あるいはまた，数字に用いられているくらいである．例えばリヨン，ローザンという地名や，20を基とする数え方，8や15を基にする考え方（たとえば1週間，2週間を8日，15日という）や，セ（C'est）という提示の表現がそれにあてはまる．

ローマのチベリウス皇帝はドルイド僧に集団禁止の法をあてはめ，人間の生贄（いけにえ）を禁じた．この事実がドルイド僧の動きを決定的に封じたことは争えない．彼らは特権を失い，町の占者，呪術者になるか，遠くイギリスの地に逃れた．そこではなおもケルトの影響が深くのこっていたからである．ゴールは，ローマから市民権を与えられた多くの人び

とを有し，ラテン語は必要不可欠の言葉となり，人びとは喜んで皇帝の役人となり，ローマ風の名前を持つようになった．カエサルの後継者アウグスツス AUGUSTUS の名は，一般的には「崇拝すべき」「神聖な」の意味となり，その神像はゴールの人びとの家で，平和と幸福，富と健康の守り神となった．8月がアウグスツスの祝祭の月となり，フランス語の8月（août）もそこに由来する．

しかしながら形は消滅してもケルト文化は長く人びとの心性に残っている．ケルトの地方の神々はローマからもたらされた神々と合体する．たとえばケルトのタラン（雷の神）はユピテル（ジュピター）と一緒になり，オーベルニュ地方のピュイ・ド・ドームの技術と産業の神ドゥミアスはメルクリウス（マーキュリー）と一体化する．森や泉はあいかわらず地方で聖なるものとして信仰された．また11月1日の「万聖節」Toussaint というキリスト教諸聖人の祭日のなかには，その半年前の5月1日における太陽と生命の蘇(よみがえ)りに対応する夜と死者への祭であったケルトの民俗的信仰の伝承が隠されている．「自然」に対するケルトの汎神論的な信仰は今もなお残っているといわねばならない．

文学の領域でいえば，後の中世文学に幾多の痕跡をのこし，「宮廷風騎士道物語群」や「聖杯物語群」にはケルトの影響を否定することができない．このようにフランス文学は，すでに冒頭のプルーストの引用でふれたように，その根底に地下水のごとくケルト文化を持っているのである．「森の文化」はしたがって，あとにやってきた「石の文化」に先立ってフランスの深い土壌を形成しているということができるだろう．

2 ギリシア・ローマ文化とフランス文学

中世フランスの知識人たちは自由にラテン語を読みかつ書き，時には話していた．ラテン語はギリシア・ローマ文化を伝承するための媒体であるほかに，当時は国際語としての役割を果たしていた．そしてある人はラテン語で恋文を書き，またある人はラテン語しかしゃべらぬように家庭教師にしつけられていたが，こんなことはさして奇異な現象ではなかった．19世紀ロシアの小説をいろどるフランス語の会話のように当時ラテン語は話されていたのであろう．

ともあれ長期間にわたる，大学・教会・法廷等公共機関への，死語であるラテン語の支配が，フランスにおけるギリシア・ローマ文化保持に大きく役立っていたことに間違いはない．フランス語は古典ラテン語に逆らいつつ，あるいは少なくともそれによって自らを鍛えつつ進化をとげた．だから「明晰ならざるものはフランス語にあらず」という有名な言葉は，たんにフランス語の明晰さを強調するにとどまらず，ラテン語に匹敵し取って代ったことの確認の宣言であった．「ギリシア語やラテン語は，スイス語や低地ブルターニュ方言同様に，習得する理由はない」と書くデカルトですら『方法序説』を除いては著作・論文のほとんどすべてをラテン語でしたためた．こんな話が伝わっている．出版後しばらくしてラテン語に訳された『方法序説』を19世紀のある学者が御苦労にも仏訳し，こちらの方が17世紀の仏訳よりすぐれていると自慢したそうである．デカルトの世紀では哲学書がフランス語で書かれることは画期的なことであり，当時はフランス文法すらラテン語で

書かれていた．フランス文化がラテン語の強い影響から脱するようになるのは「新旧論争」をへてロマン派の時代に入ってからである．しかしこのことがただちに，フランス文化がラテン語と縁を切ったことにならぬところがかえってフランス的なのである．まことに「過去のほうを向いたまま後ずさりしながら未来へ進むこと」にこそ，よくもあしくもフランス文化の特性はあるのだから．パリをはじめフランス各地にはローマ時代の遺跡が散在し今なお生きた景観をかたちづくって，ギリシア・ローマ文化を現代に組入れ調和させており，そのようにフランスでは新しいものは古いものとの入れ代りをただちに意味しない．それに何よりもフランス語そのものが，俗ラテン語，つまり古典ラテン語とはかなり異なるとはいえ，民衆の話すラテン語から派生したものなのである．

*

アルベール・チボーデといえば今世紀でも屈指のギリシア・ローマ通の批評家であるが（じつはフランスでは当代の文芸同様にギリシア・ローマの文芸を論じられなければ批評家にはなれない．サント=ブーヴからロラン・バルトに至るまで），彼は小説の起源を論じてこんなことを書いている．「ギリシア・ローマ文化は喫煙者をもたぬ文化であったと同様にまた小説読者をもたぬ文化であった」．かわいそうにギリシア・ローマ人たちはタバコと小説の醍醐味を十分には知らなかったらしい．しかし逆にいうと，彼らの十分に知らなかったものはせいぜいタバコと小説ぐらいなもので，すべてはギリシア・ローマ人たちによって経験され，いわれてしまっているのである．ギリシア・ローマ的規範はおかしがたいものである．そんな余韻すらこの表現にはこもっているように思われる．

ついでにもう1行チボーデから引用しておきたい．ギリシア・ローマ文化に対するフランス文化のありようを包括的に，かつ簡明に表現しているからである．

ギリシアの光　ローマの石　南フランスの空気　フランスの大地

ある作家論の章の名を並べただけのものであるが，この象徴的な表現をとおしてわれわれは，明るいもの，重いもの，軽やかなもの，それらすべてがフランスの土壌に豊かにみのるさまを思いうかべることができる．むろん力点は「フランスの大地」におかれている．フランス人の自国文化への自信と誇りは，疑いもなく，自分こそ他国人にぬきんでてギリシア・ローマ文化の真の相続人であり，かつまた当代ヨーロッパの，いな，ことによると世界の中心にいるという二重の自覚から由来するものである．だから今世紀にいちじるしいヨーロッパ世界の崩壊という意識は，ただちにフランスの危機としてとらえなおされ，またその逆も真でありうる．危機の度ごとに叫ばれる「フランスは保存されねばならぬ」という言葉は，キリスト教文化を含めてのギリシア・ローマ文化を脅かすものへの，フランス特有の身がまえのしるしであり，こうした意味では，フランス文化は中国文化に次いで古いといえるはずである．

三千年の歳月がホメロスの灰の上に流れ
三千年このかた崇められてきたホメロスは
栄光と不死とによりいまもなお若々しい　（アンドレ・シェニエ）

このようにホメロスやウェルギリウス，そしてとりわけ彼らの叙事詩をちりばめる無数の神話的テーマは，ヨーロッパ諸国の，とくにフランスの作家たちに多くの（これは統計的事実である）素材を提供してきた．作家たちは自己をとりまく世界の意味を神話の中にさぐりあて，自己の好みにしたがって切り取った主題を変奏する．これはいってみれば枠の中における自由ということができる．例えば，オイディプス神話――ソフォクレスにより一挙に完璧な悲劇にまで高められた，近親相姦と人間的宿命の怪奇さとを扱うこの神話は，他国の作家以上にフランスの作家の心をとらえた．コルネイユからコクトーに至るまで．そしてフロイトの性理論に新しい鍵を差し出したのちには，ビュトールやロブ=グリエなど現代作家の作品や人類学者レヴィ=ストロースの鋭い分析にも素材を提供するといったように．神話は，演奏者の解釈に大幅な自由が許される総譜のようなものであり，さらにはある任意のテーマをめぐっていくつもの傑作が生れる可能性をひめている．

ローマがギリシアから受け継いだものを，フランスは改めて受け継いだ．ここにフランス文化のきわだつ特性がある．だからフランス文化にはなにかしら根源的なものの欠如がある．例えばゲルマン民族に固有なゲルマン神話のようなものはフランス文化にはなく，その欠落部分はケルト神話によっては埋めつくせぬであろう．こうした状況がかえってフランス文化をいっそう緊密にギリシア・ローマに結びつける結果となり，同時にまたフランス文化に「二次的」，批評的性格を与えることになった．こうした欠如にからませて，ミシュレの表現を借りていえば，フランス文化に固有のものとは「その深層部において攪拌(かくはん)すること」の知恵である．二次的，批評的性格はフランス文化のあらゆる面に見られるのであって，芸術もその例外ではない．芸術の質は，まず第一に芸術家が自己の内部にすぐれた批評家を宿し，その批評家を作品制作に参加させているか否かにより，判定される．

こうした知恵，あるいは批評精神をとおしてフランスがギリシア・ローマ文化から受け継いだものは，神話的テーマはもとより，キリスト教信仰に反しないかぎりでの貴族的色彩の濃い倫理観であり（アミヨ訳プルタルコス『対比列伝』への永年にわたるフランス人の偏愛からもうかがえるように），次いでギリシアにはじまる幾何学，つまり精密なものへの志向であった．例えば，それはパスカルの「幾何学的精神」プラス「繊細の精神」，さらにはこの両者を１つにしたベルクソンの「精密の精神」といった表現に見られる．同じことをいっそう抽象的にいえば，それはフランス文化における汎ヨーロッパ的，普遍的思考への好みであり，この普遍思考のおかげでフランス文化は，人種的・地理的・制度的・文化的遺産の数々を混合・攪拌・選択しつつ１つの統一あるものに仕上げた．ギリシア・ローマ文化受容の問題もその例外ではありえず，ギリシア・ローマ文化もフランスの相の下にあらわれてくる．だから例えばギリシア・ローマ文化を考慮しての，ヴァレリーによる次のようなヨーロッパ定義はそのままフランス定義におきかえうるであろう．「あくことのない活動力，熱烈なそして利害を離れた好奇心，想像力と論理の厳密さとのみごとな混在，悲劇主義に陥らぬ一種の懐疑主義，あきらめに堕することのない神秘主義」．このような定義を読むと，よく耳にするもう１つの定義を思い出さずにはいられない．いわく「フランスは散文の国である」．ヴァレリーの定義はそのまま最もフランス的なもの，すな

わち散文にも通用しうるし，そして小説を含みこんだフランスの散文が，ギリシア・ラテンのそれを凌駕(りょう)したことに間違いはない．

*

19世紀以降ギリシア・ローマ文化の影響は確かに弱まった．とくに中等教育でのギリシア・ラテン語の習得をめぐり事あるごとに論争がくり返された．アホダラ経のように古典語文法の細則を暗誦することに何の意味があるのか？　シャルル・ボヴァリー少年は「我ハ笑イ者ナリ」と二十遍もラテン語で書く罰を課され，ランボー少年は呪いつつも比類なく見事なラテン詩を書いてしまう．一般生徒の立場はおそらく両者の中間にあるだろう．とはいえ今やギリシア・ラテン語の中等教育に占める位置は「スイス語や低地ブルターニュ方言」並みであることもまぎれのない事実である．古典語習得が他国語並みの比重しかもたぬとしても，しかし，フランスにおいて，「ギリシア語，これを知らずして自ら学者と名乗るは恥辱にござ候」(ラブレー) に代表される学芸探求の精神までも衰えるとは考えられぬことである．

3　キリスト教とフランス文学

1

文学と宗教のつながりは，決して直接的でもなければ目的論的でもない．宗教が文学にあらわれるのは，つねに結果的であり，またそうあらねばならない．しかしそのように考える習慣が，文学研究において宗教の持つ意味を閑却視してきたことは争えない．とりわけ西欧の文学を学ぶ場合がそうである．キリスト教はいうまでもなく，ギリシア・ローマの文化とならんで西欧精神の基盤の1つである．それは文学とも有機的に結びついていて，何気ない文章や詩句のなかに息づいている．西欧のなかでも，フランスはキリスト教，特にカトリシスム catholicisme と密接にかかわっている．「ローマ教会の長女」としてのフランスの役割は，そのままに西欧の中心としての役割であった．具体的にキリスト教がどのように文学作品にあらわれているかを例を挙げて考えてみたい．たとえばここに1つの詩節がある．

海の星よ　ここに重き食卓布
それに麦の深き　うねる大海原
泡だつ動きとわれらの豊かな穀倉あり
ここに無限の祭服にそそがれるあなたの眼差あり

この詩節は20世紀初頭の詩人，シャルル・ペギーの『シャルトルのノートル＝ダムへのボースの奉献』という詩の冒頭にあるものである．既に題を見てもわかるように，中世以来，巡礼たちの集う中心の1つであったシャルトルの大聖堂がその主題である．ところで冒頭の「海の星」とは何であろうか．それはノートル＝ダム Notre-Dame，すなわち聖母マリア（ラテン語で Stella Maris＝海の星）のことである．聖母マリアは，また「暁の星」「動かざる星」「変ることのない星」とも呼ばれた．3世紀ごろより聖母マリア信仰

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com